黒田二名宝の五日間
～昭和の記憶　S5.5.19 → S5.5.23

セキレイ@ WagtailW

へし切長谷部と日本号の「二名宝」が昭和5年(1930)の読売新聞紙上を連日賑わしていたのはご存じだろうか？

昭和の初頭に空前絶後の日本名宝展が読売新聞社主催により上野東京府美術館(現都立美術館)において盛大に行われた(第一回は昭和4年、第二回は昭和5年)。

注目の品は事前にそれぞれの持つ来歴や逸話が「日本名宝物語」として読売紙面上に連載されており社運をかけての催しだったことがうかがえる。[1]

会期中にも連日名宝展に関する記事が煽り文句と共に読売紙面を賑わしており、目録や書籍では味わえない熱気が伝わってくる。

そんな中、黒田長成侯爵―名宝展の実行委員でもある―の秘庫が開かれ、ヘシキリ長谷部刀と日本號槍の黒田の二名宝がついに出陳となったのである。ただし、展示は初日のわずか5時間の予定であった。

名宝展開催前日の記事には、「往け、名宝展へ！」「わずか五時間に限られている」「誰がこれを見ぬと云ふ！」「先ず見よ！　そして語れである。」の煽り文句が並ぶ。

そして「何とかして時間を延長せんと奔走」し、遂には「あまりにも惜しまれるその名残と日延べの熱望とが容れられて五日間陳列するという吉報が通ぜられた」のである。「何といふ喜ばしい吉報であらうか――」そして展示五日間の最終日には「今日限りの二名宝」「再び見ることの出来ぬ今日の好機を逃さぬやう。」と締められている。

当時の熱気を感じていただきたく茲に記事の全文を書き起こす。

[1] この「日本名宝物語」は書籍にもまとめられており、国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能（フリー）―ググればすぐ出てくる―であるが、新聞に連載のものとは全くの同文ではない。特に見出しは書籍版には載っていないので熱気を感じるなら新聞記事本文をチェックだ。目録も「日本名宝展覧会」で「google 書籍検索」すると閲覧できる（google 電子書籍・著作権切れにより全文閲覧可能）。

読売新聞四月十七日

開会劈頭を飾る
名宝中の大物三つ
何れも十九日一日限りの展観
明後日に迫った名宝展

絶大な人気の■に一刻千秋の思いで待たれつつある本社主催第二回名宝展の開会もあと一日に迫った。この日正午からの一般公開に名宝展の劈頭を飾る三つの大物「日本號槍」「ヘシキリ長谷部刀」「法相秘事絵詞十二貫の第一、二巻」は閉館の午後五時まで僅かに五時間を限って陳列される特別出品、このうち「日本號槍」の興味ある由緒伝来はあす「名宝物語」の最終を飾る筈だが「ヘシキリ長谷部刀」は織田信長が近侍の茶坊主観内の反抗を詰問するや観内は主の激怒に怯えて膳棚の下に身を隠した卑劣さに立ち所にこれを斬り棄てた国重作二尺一寸の愛刀で名物刀剣中の逸品。また本邦絵巻中の金字塔「法相秘事絵詞」は全十二巻を二巻づつ六日間に亘り陳列する予定なので以上三品はいづれも一日限りの出陳であるから十九日を見逃したら再び見る■■のないものである。

読売新聞四月十八日

日本名宝物語

僅か五時間の顔見世
出た！　日本號の槍
黒田長成の秘宝
児童走卒の間にも知られた此の槍
而も何人も見たことのない此の槍

出た！　日本號の槍が！　誰もが、子供の頃より耳にすること久しい日本號の槍、何故に片鱗を窺うことすら出来ぬか何故に今日まで大衆に公開されなかったかー

それは余りにも黒田良成侯爵秘庫の扉が堅く、何人も力及ばず、昨年第一回名宝展の際にも百法秘術を尽くして、押せども、叩けど頑として左右に開かなかったものである。それが遂に今回は開かれた、そして出た、天下に名の轟く日本號の槍が！　ところが意外にも初日の十九日に、ただ五時間公開されるだけである、親は子に、子は孫に語り継ぐべき日本號の名槍を、一生ただ五時間を限り見られるとは、遺憾ではあるが、またせめてもの大幸だ！

歯の長さ凡そ三尺余、平三角造りで樋の内に龍の浮彫あり、無銘なれど、或る記録に日本郷と誤記された為め、郷義弘作と誤伝せられたが、一方には相州正廣、平安城

長吉、金房正辰等の諸説紛々、ただ足利中期の作たることは確実で、地刄彫刻共にすこぶる優秀、作風は正しく槍作中天下一品である。黒田家の記録に従えば福島正則が伏見の自邸に居る時或る日、突然に、黒田家の使者なりと称し、その門を潜る者あり、正則これを引見するに豫て黒田家の勇士母里太兵衛である。正則頗る喜んで歓待し太兵衛が好物の酒を出したが、主家を恥かしむる行為あってはと思い、太兵衛は断然拒絶。

「太兵衛、そちの勇名をきくことも久しい、然るに、勇士が酒を嗜まぬとあっては、名折れぢゃ、恥ぢゃ、いやさ卑怯であらうぞ」

正則は既に酔が廻っている。

「卑怯！」

この一言が太兵衛の胸にぐっと来たのである。

「さあ呑め、呑めば何でも望みの品を取らせる」

この時、太兵衛の眼に留まったのは、正則の頭上に懸って居る、太閤より拝領の名槍、正則自ら「日本一」と誇るため次第に世間で「日本號」と綽名して居る名物である。大杯に三つ――太兵衛は見事に乾した。

「では、あの槍を」

太兵衛は卑怯の一言に酬いる腹である。

「諾」

正則は、微笑しながら雑作もなく渡したが、翌日酔が覚めて大騒ぎ、正使を派して太兵衛に頭を下げたが、太兵衛は頑として応じない。

黒田藩では、誰が詠むともなく、

酒は呑め、呑むならば
日本一のこの槍を
呑み取る程に呑むならば
これぞまことの黒田武士

との今様が流行、その後藩士の会合ある度にこれを合唱し、現在でも筑前の懇親会、結婚披露宴などにまで踏襲されている。恐らく、これに誰かが尾鰭をつけて、朝鮮役での虎狩を出し、後藤又兵衛との交渉を作ったかどうか――今議論の限りではないが、「日本號の槍」と云えば酒屋の小僧でもしって居る。が昔語りを誇る古老ですら見た事は無いのである。

往け、名宝展へ！　公開は僅かに五時間に限られている、何とかして時間を延長せんと奔走中だが、日本を代表する名槍、天下の槍を代表する日本號なれば、国家の重宝、黒田家の秘宝として、却々許されぬ事情あり、せめても、五時間だけなりと拝み得るが、これ勿怪の幸いである、誰かこれを見ぬと云ふ！

読売新聞四月十八日

名宝展あす開場

名工巨匠の神器霊気を湛へて

おゝ胸迫るその感激

花は散れども葉桜の蔭に、また金色と咲き誇る古芸術の殿堂は古来三千年の我が国史の側面を語るべく、正しく明十九日の午前九時いと厳かにその霊妙極まる扉を左右に開き、そこに我君国特有の世界、万人ともに愛らかな秘境を展開し、これを主宰するあらゆる古芸術の神々は、人々をして存分に忘我の三昧境（さんまいきょう）に遊ばしめんとするのである。

すでに第二回日本名宝展覧会の計画に着手してより、斯く開会を見るまで費やすこと僅かに四か月、即ち、この短日月間において斯くの如き国家的一大事業を実現し得たこと、実に識者はこれを破天荒なりと喚んで驚嘆して居る。

ともかく、名宝の殿堂は明朝開扉されるのである、一歩を府美術館の石段にかくれば、早くも名工巨匠の霊気を感じ更に一歩を踏み入るれば、忽ちそこには風格詩韻ともに縹渺（ひょうびょう）として遍る水墨の天地あり、凄艶にして秀麗極まりなき絵巻の国ひらけ、転すれば絢爛月も眩ゆき美術工芸の集まり、また他を顧みれば秋霜峻烈（しゅうそうしゅんれつ）を肌に覚ゆる名刀の林は続き、或いは、その豪壮華麗を一世に誇らんとする屏風の金壁があるなど、一度この殿堂に入ればまた再び出づるを忘れしめ飽くまで恍惚たらしめずば止まぬのである。

先ず見よ！　そして語れである。誇らかに待つ天下の名宝、その真価に接する絶好の機会なのである。特に、名槍「日本號」並びに名物「ヘシ切り長谷部」の神刀は明十九日の一日を限り大衆に公開を許されてあるもの、この機を逸しては孫子の代まで見るを得ず、全く貴重な第一日ではないか！

読売新聞四月十八日

「日本號」槍と「ヘシキリ長谷部」刀 二十三日まで展覧日延

開会第一に名宝展を鑑賞した人々は口を揃えて、荘厳の気漂う場内の偉観に全く魅惑され恍惚として名宝気分に浸った。激賞、礼賛の聲(こえ)は一品、一作の前に漏らされていた。この会場に十九日一日だけそれも正午から午後五時までの僅か五時間だけの陳列であった黒田侯爵の秘宝「日本號槍」と「ヘシキリ長谷部刀」はあまりにも惜しまれるその名残と日延べの熱望とが容れられて二十三日まで五日間続いて陳列するという吉報が昨日午後、黒田侯家から通ぜられた。何といふ喜ばしい吉報であらうか。

読売新聞四月十八日

今日限りの二名宝

開会日の十九日当日だけとして出陳された黒田侯爵家の秘宝「日本號槍」と「ヘシキリ長谷部刀」は鑑賞者の熱望が容れられて特に五日間陳列され呼物となっていたが■々今二十三日午後五時限り黒田家の秘庫に返されるのである、再び見ることの出来ぬ今日の好機を逃さぬやう。

用語解説

個人的に意味や読み方が分からなかったものをピックアップして解説(コトバンクより)。

【三昧境(さんまいきょう)】無我の境地。

【劈頭(へきとう)】物事のいちばん初め。最初。冒頭。

【縹渺(ひょうびょう)】広く果てしない様。かすかではっきりとしない様。

【秋霜(しゅうそう)】刀剣(霜のように光るところから)。特に鋭く光る刀剣。

【峻烈(しゅんれつ)】非常に厳しく激しいこと。また、そのさま。

第二回 日本名宝展覧会目録

△ 会場東京府美術館

△ 会期昭和五年 四月十九日より 五月十五日迄

一期一振　一口　御物
和泉守兼定　一口　侯爵細川護立家
（歌仙兼定）
光忠　一口　侯爵細川護立家
備前吉房　一口　元帥東郷平八郎
助眞　一口　国宝　日光東照宮
新藤五国光　一口　伯爵小笠原長幹家
景光・景政両作刀一口　伯爵奥平昌恭家
正宗　一口　伯爵津軽義孝家
則宗　一口　子爵土屋正直家
守家　一口　子爵土屋正直家
備前助包　一口　根津嘉一郎家
備前長義・兼光　大小二口　根津嘉一郎家
古備前眞恒　一口　国宝　静岡久能山東照宮

日本號の槍　一筋　侯爵黒田長成家
長谷部国重　一口　侯爵黒田長成家
（へし切長谷部）
一國兼光　一口　侯爵山内豊景家
友成　一口　男爵山本達雄家
御手杵の槍　一筋　伯爵松平直之家
埋忠明壽　一口　男爵古河虎之助家
石田貞宗　一口　小川悦之助家
二字国俊　一口　帝室博物館
伯耆安綱　一口　帝室博物館
當麻國行　一口　伯爵阿部正直家
粟田口國吉　一口　子爵秋元春朝家
（鳴狐）
氏家貞宗　一口　子爵秋元春朝家
大原眞守　一口　子爵秋月種英家
備前長船修理亮盛光一口　木村久壽彌太家
土佐吉光　一口　溝口直亮家
（坂本龍馬愛用大小）
無銘　大小二口

かっこ内は編集者による注記

黒田刀剣～明治の記憶

手元にある資料（新聞アーカイブより取得）から明治時代に展示された黒田家関連の刀剣及び同時に展示されていた著名刀を紹介します。

特に靖国神社春秋の大祭（五月、十一月）時に遊就館において三日間程名刀を集めて一般公開が行われていました。特に明治刀剣界の重鎮今村長賀が館長になった頃から（明治十九～）旧大名諸家の秘蔵名刀が盛んに展示されており、当時の新聞には出陳の名刀と出陳者が掲載されました。多くの旧大名家が色々出陳していますが黒田家は出品が比較的多く、しかも毎回刀剣を変えて出陳しているように思えます。また、明治３１年の豊太閤三百年祭では黒田家は特に多くの重宝を出陳しています。

明治の時点での黒田家の刀剣乱舞実装刀はへし切長谷部のみですが、後述の通り明治１９年に江雪左文字、明治３１年に骨喰藤四郎とにっかり青江と共に展示されています。（実装刀は令和元年９月時点のもの。）

さらに、このような一般公開の出陳リストは所有者が記載されていることから、来歴調査の裏付けの資料として非常に重要な役割を果たすときがあります。昭和頃の刀剣の大家が書いた資料には刀剣の来歴・所有者に関しては間違った伝聞の類が書かれてしまったことで近代の出来事にもかかわらずはっきりしないものも多く、時には矛盾する二説が混在することもあります。このような事態も、新聞記事というリアルタイム情報を用いることで白黒つけることが可能になります。

例えば鶯丸の展示記録（明治２１、２２小笠原家より）が掘り起こされたことから、これまでの小笠原家からの売却時期（明治１５年以前）を明治２２年以降と補正することができ、厚藤四郎の展示記録（明治２２田安徳川家）からは、明治時代にもかかわらず所有者のはっきりしなかった（御三卿の田安家説と一橋家説が混在）界隈の論争がひとつ決着しました。

黒田家に関して、明治以降どのような歴史をたどったのかあまり詳しくないので、ここに挙げる記録は大した情報ではないかもしれませんが、もしかしたら誰かの心の琴線に触れる事項があるかもしれませんので書き起こします。

読売新聞明治十九年五月六日

靖国神社例祭につき五日から九日まで遊就館に陳列さるる特別品。

徳川家康公佩刀江雪左文字の刀（徳川茂承君＝紀州家）、
池田正宗の刀（徳川義禮君＝尾張家）、
圧切り長谷部の刀（黒田長溥君）、
織田左文字の刀（井伊直憲君）、
桑名郷（本多忠敬君）、
他。

注　明治十九年当時の黒田家の当主は長成だが、長谷部の出陳者は先々代の長溥になっている。織田左文字は、関東大震災で焼身となりその後再刃されている。２０１９年佐野美術館のREBORNで展示。

東京日日新聞明治二十二年五月五日

靖国神社例祭につき五日から九日まで遊就館に陳列される品。

三条宗近の太刀（黒田長成侯より）、
稲剪といふ備前兼光の刀（本多忠敬伯より）、他。

読売明治二十二年十一月二十六、七日別刷

靖国神社大祭につき遊就館にて五日～七日まで公開ならびに二十一日、二十二日に招待客に公開。

名物厚藤四郎吉光の短刀（徳川達孝君出品＝田安家）、
名物上野貞宗の小脇差（徳川義禮君出品＝尾張家）、
名物庖丁正宗の小脇差（同）、
名物戸川志津の小脇差（同）、
名物備前国一文字助宗の刀（荒波）（井伊直憲君出品）、
名物岡本正宗の脇差（黒田長成君出品）、
鶯丸と称す備前国友成の太刀（小笠原長育君出品）、
他多数。

注記　一般公開の日時は日本新聞十一月五日の記事より。本記事は比較的最近発掘された（本年7月末頃）。この記事により厚藤四郎および鶯丸の明治期来歴に関する情報がアップデートされた。厚藤四郎は東京国立博物館に所蔵される前に徳川御三卿の一橋家にあったとも、御三卿の田安家にあったとも刀剣書に書かれており（例えば、一橋＝「皇室・将軍家・大名家刀剣目録」、田安＝「刀剣と歴史417」）界隈の間でも来歴がフワフワしていたが、この記事から明治中頃は田安家であったことが確定された。（昭和１３年の国会図書館に納まったときに出た新聞記事でも田安家からとなっていた。読売S13.5.13）また、この記事は鶯丸が室町中期以降の所有家である旧勝山藩主小笠原家所有を示す現在知られている最後の記録となっている。（明治２１年にも遊就館で展示・読売M21.11.6）これらの記事から鶯丸が小烏丸（明治十五年献上）と同時期に宗伯爵家に入ったという説（「刀剣談」）は否定された。ついでに補足すると、この展示の後どこかで鶯丸は小笠原家から売却されし

ばらく転々とし、明治３２年くらいに宗伯爵家に入って（読売M32.7.5）、宗家から明治３９年頃田中光顕に売却され明治４０年に献上されている「伯爵田中青山」。（宗家→田中は田中本人の証言なので、宗家から山本達雄や秋元子爵に売却「日本刀鑑定秘話」「日本刀を研ぐ」というのは誤りであるといえる。）厚と鶯丸の明治頃の来歴に関する考察は web(巻末に URL あり）を参照のこと。

読売明治二十六年五月五日

靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品
来国行の刀白鞘二尺三寸六分（黒田長成侯）
他多数。

読売明治二十六年十一月四日

靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品
白鞘入り信国の刀一振長二尺三寸一分余
（侯爵黒田長成氏出品）、他多数。

読売新聞明治二十七年九月十一日

黒田侯、旧藩出身の武人を励ます。去る八日赤坂溜池なる自邸へ旧藩出身の在京武人を奨励演説をなし一大饗応を為したり長政公の品々を縦覧せしめたり。
長政公御召水牛御兜
碇切（長さ一尺九寸一分）
白熊大旗（柄口梠竹金物唐草毛彫）

読売明治二十八年十一月八日

靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品
鍋島郷御刀（御物）、
恒次刀二字銘（侯爵黒田長成氏出品）、
他多数

読売明治二十九年十一月六日

靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品
黒田長成侯の備前国兼光太刀
（金の太刀　刃の長さ二尺四寸一分白鞘入り）、
蜂須賀茂韶侯の備前国正恒刀
（刃の長さ二尺五分五寸白鞘入）、他多数

読売明治三十年十一月七日

靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品、二十五日まで総覧ゆるす由。
名物日光一文字刃長さ二尺二寸四分白鞘入り
（侯爵黒田長成君出品）、
他多数。

読売明治三十一年一月二十八日他

来る四月（会期四月一日から五月三十日）より京都博物館に於て開くべき豊公遺物展覧会（豊太閤三百年祭）の出品左の如し（黒田の出陳は刀剣以外も記載）

再拝柄　三本　黒田侯爵蔵
白熊大再拝　同上
北條白貝　同上
日光一文字刀　一振　同上
青山琵琶　一面　同上
圧切刀　一口　同上
碇切刀　一口　同上
犬坊弓　一張　同上
新古今集抄　一冊　同上
堀河院百首　一冊　同上
一国　槍（平安城）一本　同上
秀吉公真蹟消息　一幅　同上
筆耕圖　一幅　同上
永徳筆八満湘景圖　一幅　同上
太刀（青江貞次作）　一口　京極子爵蔵
　にっかりと称す一尺九寸九分余
はばき国行刀　一口　伊達伯爵蔵
骨喰藤四郎刀　一振　豊国会蔵
片鎌槍の身　一本　帝室博物館蔵
（加藤清正所持　紀州徳川に伝わり同家より献納）

注　豊公三百年祭は明治31年4、5月の2カ月間にわたって京都博物館で行われた。黒田侯爵と蜂須賀侯爵が中心となって、前年から豊国神社の整備を行っており、黒田長成侯爵は、主催の豊国会の代表になっている。そうか、三百年経っても黒田は豊臣の・・・なのか・・・と感慨深く思ったりしたり。

この展覧会の展示品目は読売に詳しく掲載されている。(1/27、1/28、1/29、1/30、2/1、2/11) 追加の展示品は東京朝日(3/11、3/12)を参照した。本文には由緒が書かれているものもある。目録は「豊臣太閤三百年祭参拝道しるべ」（国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能）にも掲載されているが、追加で展示の決まった骨喰、清正の片鎌槍などは記載されていない。また、この目録にはにっかりが「青江貞次太刀」とのみ書かれており寸法表記もないので、これがにっかりであることがわかりづらい。（にっかりだけわざわざ太刀表記・・・深淵なる訳があるのか？）

東京朝日明治四十年十一月五日

五日から七日まで靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品。

古備前包平一腰二尺五寸一分五厘

金着二重ハバキ付（侯爵黒田長成氏出品）、

吉岡一文字助吉刀一腰刃長二尺三寸一分半

この刀の号を道芝露という（子爵秋元興朝氏出品）、

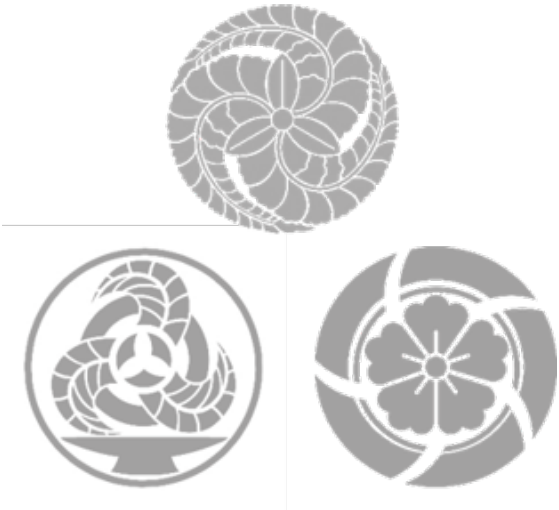
他多数。

東京朝日・・・明治四十？　年

靖国神社の大祭につき遊就館にて出陳の品

黒田侯の備前眞□刀、他。（□＝判別できず）

すみません、日付のメモがどっか行ってしまった。（明治四十一年以降だと思う。）



附録 セキレイ的へし切長谷部イメージポエム

原著：トーマス・モブレー（新渡戸稲造「武士道」）より

Myself I throw, dread sovereign, at thy foot.
My life thou shalt command, but not my shame.
The one my duty owes; but my fair name,
Despite of death, that lives upon my grave,
To dark dishonor's use, thou shalt not have.

畏るべき君よ、わが身は御許に捧ぐ
わが生命は君の命のままなり
わが恥はしからず
生命を棄つるはわが義務なり
されど死すとも墓に生くるわが芳しき名を
暗き不名誉の用に供するを得ず

編集後記

こんにちは、鶯丸調査沼に生息中のセキレイです。この「黒田二名宝の五日間」は、今年の4月頃に新聞から掘り起こしてTLに放流したネタですが定期的にRTされているのでもしかしたら黒田沼の隅々まで行き渡っていないのかもと思い、侍展を機に衆生済度のためにまとめ直しました。おまけで明治の展示記録を載せておきます。がちゃがちゃと新聞記事を書き起こしているだけですが黒田沼の界隈の方にへーほーふーんと思っていただければ幸いです。（自研究内容をちゃっかりと入れこませていただいています。）誤字脱字等もあると思いますので研究資料としてご参照の際は原本をご確認ください。読売（ヨミダス）、朝日（聞蔵2）、東京日日（毎策）は一部図書館でアーカイブ利用でき、ヨミダスと聞蔵はキーワード検索可能です。新聞には未発掘の記事がまだまだたくさんあると思います。レッツ沼！

附録のモブレーの詩は昔からめっちゃ長谷部～と思っているのですが、これを機に布教。同士求ム！

編集＝セキレイ　twitter ID ＝@WagtailW

Website
月日星
このPDF取得可
http://wagtail.chagasi.com/index.htm

お題箱
感想ご質問など
https://odaibako.net/u/WagtailW

令和元年九月二日ネップリ発行 ver. 1.0

表紙絵　「イラストAC」より